

発達検査と対人援助学

③ 発達検査・発達相談の正しさとは

大谷 多加志

本稿がアップされる頃、予定通りであれば「新版 K 式発達検査」の最新版(2020 版)が無事公刊されているはずですが、改訂版発行の計画が立てられてから 7 年超の作業に区切りがついたわけで、安堵の気持ちもあるのですが、思いの他やり切った感は小さく、少しだけモヤッとした感覚もあります。

理由は多分いくつかあります。ひとつは、「やり残しがある」ことです。改訂版の作成においては、7 年前に計画を立て、5・6 年前からデータ収集を始め...と長期間の作業を行ってきました。その中で、作業をしながら気が付いたことや、時間的な問題もあり継続的な検討課題に残したこともいくつかあります。しかし、気づきがある度にデータ収集をやり直していたのでは、過去の古いやり方で収集したデータを捨てなくてはいけなくなり、データ収集に追加的な時間や予算が必要になります。それは現実的ではないので、その時々気づきは「今後の課題」として蓄積されていったわけです。このような積み残しは、次の改善につなげていくことにはなりますが、おそらく次も同じように作業を進めながら気がつくこともあるはずで、結局のところ試行錯誤と改善の営みを続けていくしかないということなのかなと思っています。そして、たぶんそれで良い

のだろうとも思います。

作り替えられていく検査とそれを学ぶ検査者

「新版 K 式発達検査」は 2001 年以来(正確には 2002 年 3 月以来)の約 20 年振りの改訂であったわけですが、世界的にみると知能検査や発達検査の改訂のスペンは以前よりも狭まっています。スペンが短いものでは 10 数年くらい。つまり、より短期間で、より頻回の改訂が行われるようになってきています。

これは、現代社会の変化の速さを反映しているとも言われています。少し前の価値観や技術が、5 年と待たずに変化したり、陳腐化してしまったりします。短期間でツールがブラッシュアップされていくことは、良いことのようにも思えますが、その都度、新しいツールの使い方を学習し、使い慣れていくまでの苦労を重ねる検査者を見ると、そもそも「何のための」ツールであったのかという点への意識が薄れているように思える時もあります。

検査の実施と行動観察

これは検査初心者であった頃からの実感としてありますが、検査に不慣れなうちは検査を実施するために割く心理的コストが

大きくなり、子どもの行動観察を行う余地が乏しくなりがちです。そうすると、検査を取り終えても、検査課題の成否や数値的な結果くらいしか言えることがなく、助言や支援方針を立てる段階で困ってしまう...というの陥りやすいパターンのひとつであるようにも思います。

K 式発達検査は改訂を重ねても、検査内容の多くはそのまま引き継がれ、改訂に伴う検査者の負荷は最小に留められています。これまでの実践から得た「臨床の知」を生かすことや、目の前の子どもの観察を重視するという姿勢が表れていると言えるかもしれません。

発達支援、特別支援は本当に豊かになったのか？

「的確なアセスメントのもと、有効な支援アプローチを選択し、子どもの支援に活かしていこう」。2000年代、このような呼びかけのもと、アセスメントや支援方法に関するたくさんの研修が行われ、関連する書籍も数多く出版されました。

しかし、この結果、発達支援や特別支援教育の現場は豊かになったのでしょうか？変化がなかったということはないでしょう。しかし、豊かになったかどうかという点については、現場の一端に関わった者として、すぐに「はい」とは言えない感覚があります。ケース会議や研修で出てくる支援者の悩みは、今も昔も変わらず「このケースはどうしたらよいのか...？」で、その中身が以前と大きく変化しているようには思えないからです。

足りないものは？

児童発達支援事業所などでは、個別支援計画に基づく発達支援が求められ、その中で子どもの発達についても「フォーマルなアセスメントツール」での評価が奨励されてきた経過があります。フォーマルなアセスメントツールとは、発達検査などに代表される規格化されたアセスメント法のことで、支援者の主観的な評価ではなく、より総合的で客観性の高い評価が重視されてきたと言えると思います。

一方、実際の支援の現場では「多くの子どもに有効なアプローチ」ではなく、「この子どもに今必要なアプローチ」を繰り返し行っていくことが求められます。つまり、多くの人に有効なアプローチであったとしても、目の前の子どもに有効でなければ意味がないのです。

そのために必要なことは「トライ & エラー」ですが、よりよい形を模索するのであれば「仮説と検証」と言う方が望ましいのかもしれないかもしれません。適用の可能性が高そうな支援仮説に基づいて支援を実施し、子どもの反応や結果を検証して、修正していく...というような流れです。そして、この流れの中には必ず「エラー」があります。「ちょっと違うかも」「ピタッとこない」というエラーに気づき、改善を繰り返すことこそが重要で、そういう意味では今の発達評価は「正しさ」を追求するあまり、「間違い」に気づいたり、認めたりすることが遅れやすくなっている面があるかもしれません。

私たちは説明を求めすぎている？

“正しい方法が、うまくいく方法とは限らない”。最近耳にして心に残っている言葉で

す。「正しいかどうかとうまくいくかどうかは別」というのは、当たり前と言えば当たり前のことですが、私たちはつい「正しいかどうか」に気を取られがちです。

うまくいくかどうかはやってみないとわからないですが、「正しいかどうか」は説得力や根拠などによる裏付けが必要になります。つまり、『こうするのがよいと言われている』という先行例や研究結果、時には『〇〇先生が□□と言っていた...』のように特定の人が根拠にされる場合もあります。

ただ、これらの説明はすべて根拠を自分や子どもの外側に求めています。つまり外的な基準や知識、権威などです。しかしながら、本当に必要なのは、検査者や子ども自身の反応から仮説を導き出すことではないかと思えます。それは、検査者自身の気づきや感じたことに目を向けることであったり、子どもの内的世界を想像することであったり、つまりは自分や子どもの内に理由を求めていくことであるとも言えるかもしれません。

仮説にできること

検査結果から見立てた子どもの発達像は、そういう意味ではいくらかは主観的なものであり、客観性が担保できないという意味で、仮説にとどまるかもしれません。また、実際のところ、仮説が明らかに間違っていた場合は何となく後からわかりそうですが、「合っていたかどうか」は最後までわからないように思います。子どもの成長がその後順調であったとして、それが発達相談の見立てと助言による結果なのか、単に子ども自身の成長の力なのかは判別できないからです。

反対に言えば、ひょっとすると仮説は正しくなくても、結果的にうまくいけばそれでよいのかもしれません。検査結果の説明を受けて、支援者と家族が「なるほど！」と（間違っていたとしても）考えを共有して連携しながら子どもと関わろうとすることは、子どもにとっても良い影響をもたらす可能性が十分にあると思います。

『うまくいってればよい』

1月から、編集長の団先生が講師を務める家族理解入門のオンライン研修会（「団士郎さんと家族を学ぼう」全6回）に参加していて、大いに学び、刺激を受けている。

その中で「家族の構造」についても学ぶのだが、『構造的に、家族はこうあるべき、なんていうことはない』、言い換えれば、『他者から見てどれほど不合理で違和感があるように感じられたとしても、その家族がそれでうまくいっているなら、何でもよい』と述べておられたことが印象に残りました。ただ、それでうまくいっていないから相談につながるわけで、その時は意地にならずに何か変化を起こしてみませんか、というのが一つのアプローチとなる、ということです。

この話を聞いていて、これまでにうまく整理がついていなかったいくつかのことがずっと腑に落ちたように感じました。

ひとつが、先述した「仮説」のこと。私たちは自説が「正しいか否か」にこだわり、説明を求めることに夢中になりすぎていなかったか。理論に裏付けられた「適切な」説明をした後、ケースの状況が好転しなかった時に、それを保護者や関係者の努力のせいにしていなかっただろうか。説は正しくな

かったとしても、「その子どもや家族のことを懸命に考えた」ことが、例えば「熱意」や「誠意」が、伝わった結果として、事態が好転したのであれば、その相談は有用だったと言えるのではないか。

ふたつめは、保護者への助言のこと。発達相談に来た保護者に対して専門家が行う助言から、保護者は『子どもの意欲や関心に敏感に、発達促進的な関わりを行いつつ、一方で親の期待で負担や無理をかけることが厳に慎まないといけない』と求められているように感じられることが、時にあります。つまり、障害や発達の遅れを知り、子どもと関わる意欲を失った保護者には『こんな風にかかわってあげて!』と助言し、発達の遅れを取り戻そうと習い事やトレーニング、療育などをぎっしり組み込む保護者には『子どもの負担を考えてあげて!』と助言されたりします。これは、確かに「正しい」助言なのだと思います。

一方で、世の中の育児はさまざまです。『子どもは良く食べて遊んで寝るのが仕事!』と、素朴な育児をモットーにする家庭もあれば、『添加物の入った食材は使わない』、『グローバルな世界を見越して家でも英語を使おう!』など、それぞれにこだわりをもった育児を進める家庭もあります。そして、子育て支援の専門家と呼ばれる人も、それらの家庭でとくに困ったことが生じていなければ（うまくいっていれば）、取り立てて『子どもの負担も考えて!』と、おせっかいは言わないわけです。

人のやることが全部「正しい」なんていうことはないのだと考えれば、弱さや困りごとを抱えた人の考えや行動の中に「正しくない」部分を見つけることはそう難しくは

ないでしょう。ただ、それを指摘することが、何かの役に立つとは限りません。発達相談に来られる家族は、ただでさえ大変な子育ての中で、少数派としての悩みや困りごとを抱えた家族であるとも言えます。その家族のやり方で、今より少しだけ“うまくいく”方向に進んでいけるように応援したいと願うのであれば、支援者にできることは、日々の努力を労いながら、まずは小さな変化を促し、支えることに尽きるのかもしれない。